

京都大学	博士（地域研究）	氏名	松本 美予
論文題目	レソト王国山岳地における社会変動と土地利用変化		
（論文内容の要旨） 自然資源に強く依存した農牧業を営む人々にとって、土壌浸食は深刻な自然的基礎の劣化を意味する。南アフリカ（以下南ア）に周囲を囲まれる山岳国レソトは、土壌浸食が深刻な土地として 1930 年代から注目を集めてきた。稠密な人口を背景とする急斜面での過耕作・過放牧が原因とされてきた。しかしこうした人為的要因が生まれてきた歴史的背景に関する研究はほとんど行われてこなかった。本論文は、レソト山岳地での土地利用変化を、南アの社会経済変動との関連の中で明らかにし、その上でレソトにおける土壌浸食の発展過程を再検討することを目的とした。論文の章立ては以下の通りである。 序章では、問題の提起と対象国となるレソトにおける土壌浸食の歴史、土地利用制度をめぐる伝統的支配体制および土地法に関する概説を行った。 2 章では、南アとの関わりの中でレソトの国境線が確定されてきた経緯について述べた。1830 年代のオランダ系移民ボーア人との紛争の結果、肥沃な平野部が奪われ、人口稠密な山岳国家となった。 3 章では、1868 年のイギリス植民地化以降の歴史を、南アの金鉱業の発展や、アパルトヘイト政策を中心に記述し、それがレソトの人々に与えた影響について検討した。19 世紀末に南アで鉱山開発が進むと、レソトは鉱山地域への穀物供給地となった。このための集約的農業が土地を疲弊させ、1903 年以降は食糧輸入国となった。それ以降南アの金鉱山への出稼ぎが急増し、レソトの南ア依存は政府歳入面でも高くなった。しかし、1980 年代以降、鉱業における機械化の進展やアパルトヘイト撤廃の影響から、外国人労働者の枠が縮小され、レソトからの出稼ぎも激減した。これが、レソトの農業社会に大きな打撃を与えた。 4 章では、山岳地への移住過程を、国内の低地や南アとの関わりの中で記述した。1890 年代、低地で土地不足が起きると、それまで移牧地であった山岳地への定住が始まった。首長の“配置制度”で山岳地の人口は急増し、1960 年代には土壌浸食が指摘され始め、放牧地の利用制限が実施されるようになった。 5 章から 8 章までは、現地調査結果をもとに山岳地の現在の土地利用の実態を明らかにした。また、出稼ぎが盛んであった過去の土地利用に関する聞き取り調査も行い、この地域の環境変化について考察を行った。5 章では、調査村の概要と自然環境の特徴を記述した。L 村の開村は、全国的に山岳地への移住が増加した 1890 年代である。標高 2400m から 2800m の間に広がる L 村には、傾斜の異なる複数の地形面があり、それらは土壌や気温が異なる多様な環境を有している。また、冷氣湖の存在が明らか			

になり、その居住地や土地利用選択への影響についても考察を行った。

6 章では、L 村の農牧業と土地利用について分析し、耕地や牛を持たない世帯が、それらを所有する世帯と貸し借りを行う制度があることを明らかにした。セヤスローロという制度では、牛の所有者が耕地を借り、播種と収穫作業は土地所有者と共同で行ない収穫は 2 分している。また、現金支払などで耕地を借り上げるキロというリース制度もある。これらの制度は、農耕の重要性が増しつつある現在、世帯間での労働力の過不足を調整する役割を担っていることが明らかとなった。

7 章では、土地利用と自然環境条件の関係を分析し、耕地と放牧地は異なる地形面に対応して垂直的な土地利用形態が見られることを示した。斜面の傾斜や堆積層の厚さ、さらには高度による気温差などが耕地や放牧地利用さらには居住地選択にも影響を与えていることを明らかにした。

8 章では、聞き取りの調査結果をもとに、開村初期、出稼ぎ最盛期、出稼ぎ衰退期の 3 期に分けて L 村の生業変遷について分析した。開村初期、村内では主に牧畜が営まれ、1930～1970 年代までの出稼ぎ最盛期は、殆どの男性が鉱山労働に出かけ、農耕は自給レベルに止まり、仕送りは農牧業への投資に使われた。1980 年代以降の衰退期になると、鉱山労働が激減し、家畜泥棒の被害も増え、多くの世帯は 2 大現金収入源を断たれ、農耕への依存を高めていることを明らかにした。

9 章では、L 村の土地利用変化と生業変遷の関連性を参考にしつつ、レソト山岳地の土壤浸食の要因を、南アの社会経済変動との関係性の中で再検討した。レソトの土壤浸食問題は、少なくとも 19 世紀末のボーア人に対する輸出作物生産の影響や、出稼ぎ最盛期の過放牧の影響、さらには現代の農業集約化の影響等に分けて考えなければならないことを明らかにした。また 1980 年代以降深刻になってきている出稼ぎと牧畜の衰退は、耕地の集約的利用や放牧地での燃料用灌木の採集を盛んにしてきており、新たな土壤浸食の危険性をはらんでいることも指摘した。

以上、本論文では、山岳国レソトの土地利用変化を、イギリス植民地時代の土地管理政策や南アの社会経済変動との関連で歴史的に考察してきた。その結果、人口稠密や過放牧が原因とされてきたレソトの土壤浸食の要因が、時代によって異なる複数の理由から成り立っていることを明らかにした。そして、1980 年代以降のレソトの山岳部は、これまでもまして土壤浸食の拡大の危険性が高いことも示唆した。

(論文審査の結果の要旨)

レソト王国は、南アフリカ共和国(以下南ア)国内のトラケンスバーグ山脈の山中に位置する山岳内陸国で、南ア経済に強く依存した小国である。この国は、長らく南アへの低賃金鉱山労働者の供給地(リザーブ)として、現在は水および電力の供給地として、南アと密接な関係にある。レソトは、早くから土壌浸食が深刻な地域として環境問題の専門家から指摘されてきた。しかし、その環境破壊の原因に関する科学研究は、南アとの政治的関係も影響し、あまりなされてこなかった。本論文は、そのようなレソトの中でもとりわけ研究蓄積の少ない奥地山岳部における土地利用変化の現状と歴史的变化を解明することにより、レソトの環境変化のプロセスをより正確に解明しようとしたものである。

著者は最初に、レソト国家の国境線確定の経緯(2章)と南アとの政治的経済的関係(3章)について述べ、レソトの人々の土地利用が、南アの政治経済と深く結びついてきたことを歴史的に跡づけた。レソトは、19世紀末には、急展開する南アの鉱山開発地域に向けた食糧供給基地となり、低地平野部では小麦などの穀物栽培が急拡大した。しかし限られた土地での集約的な農業は土地を疲弊させ、加えて旱魃も度重なり、20世紀初頭には食糧の輸入国となってしまった。平野部では土地不足が深刻になり、首長の「配置制度」により山岳部への移住が盛んになった。土壌浸食問題の深刻さが平野部において認識されるようになってきたのはこの頃である(4章)。

1930年代以降 1970年代までは、南アの金鉱山への出稼ぎが盛んになり、レソトの農村部は男子労働力の少ない時代が長く続いた。この間農業生産の主な担い手は女性たちで、自給的生産が中心であった。出稼ぎ収入の多くは家畜購入にあてられ、山岳部の牧草地での放牧がこれまでに多くなった。しかし、1990年代に入ると、鉱業部門での機械化の進展やアパルトヘイト撤廃の影響で、金鉱山での外国人労働者の雇用が削減され、レソトからの出稼ぎは激減した。

南アとの政治経済的な強いつながりの中で、レソトの奥地山岳部における土地利用がどのような変遷を遂げてきたのか、現地調査の結果から考察されている(5～8章)。5章では、全国的に山岳地への移住が進展した 1890年代に開村された村の1つ L村の概要と自然環境の特徴が述べられている。標高 2400mから 2800mの間に広がる L村には、傾斜の異なる地形面が複数あり、それらの地形面は土壌や気温が異なり、多様な自然環境から成り立っている。

6章では、L村の農牧業と土地利用について分析され、その中でセヤスローロやキロと呼ばれる牛と土地との貸借制度があることが明らかにされている。前者は、牛の所有者と耕地提供者が共同で播種と収穫作業を行い、収穫を折半するという制度で、後者は、現金で耕地を借り上げる制度である。これらの制度は、1990年代以降出稼ぎ者が減り、農耕依存が高まる中で急速に展開してきているという。

7章では、土地利用と自然環境条件の関係が考察され、耕地は傾斜が緩く堆積層が厚い段丘面や低地に、放牧地は傾斜角度に関係なく堆積層が薄い場所にあり、同じ耕

地の中でも、日中の気温の高低で栽培作物の種類が異なること、さらに居住地は傾斜変換点の湧水地の近くでしかも夜間に発達する冷氣湖の影響を受けない段丘上部に位置しているといった垂直的土地利用がなされていることを明らかにしている。

8 章では、聞き取り調査の結果をもとに、出稼ぎと村の生業変化との関連性について、開村初期（～1920 年年代）、最盛期(1930～1970 年代)、衰退期(1980 年代以降)の 3 期に分けて考察している。開村初期は南アへの出稼ぎが徐々に拡大し村内では牧畜が主体であり、村の男性の殆どが出稼ぎに出かけた最盛期には飼養家畜頭数が急速に拡大する一方、農耕は女性に任され、そして衰退期に入ると、村に留まる成人男性が増えたものの、出稼ぎ収入減とこの時から増えた家畜泥棒の被害によって多くの世帯が現金収入を減少させ農耕への依存を高めてきていることが明らかにされている。

9 章では、L 村の土地利用と生業の変化の関連性を参考にしつつ、レソト山岳部における土壌浸食を巡る議論を再検討している。その結果、レソトの土壌浸食問題は、少なくとも 19 世紀末のボーア人に対する輸出作物生産の影響や、出稼ぎ最盛期の過放牧の影響、さらには現代の農業集約化の影響等に分けて考えなければならないことを示唆している。そして、1980 年代以降の出稼ぎと牧畜の衰退は、限られた耕地での換金作物の栽培拡大や、家畜糞の代替燃料である放牧地での灌木採集を増大させており、新たな土壌浸食の危険性をはらんでいることも指摘している。

この様に本論文は、レソトにおける生態環境利用の変遷が、南アの社会経済と密接に連動しながら展開し、それが現在のレソトの環境問題を捉える上で不可欠であることを、歴史生態学的視座から具体的に提示したものであり、南部アフリカ地域の地域環境研究に重要な貢献をなす論文であるといえる。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものとして認める。また、平成 23 年 1 月 27 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。